

## 親性の「個人化」

### ——家族の分析視角としての「個人化」論の可能性——

斎藤 真緒\*

本稿は、親性—大人の側からの子どもとの関係性に対する意味づけ—の「個人化」に関する一考察である。「近代家族」において親性は、母性愛を基盤とする母-子関係の中に一義的に集約されてきた。従来女性運動やフェミニズムではこの問題がしばしば論じられてきているが、「近代家族的母-子関係」以降の新しい母-子関係、ひいては父-子関係をも射程に入れた親子関係のあり方の輪郭はまだはっきりとは見えていない。新しい親子関係をめぐるひとつの手がかりとして、本稿では、ウルリッヒ・ベックの「個人化」論を用い、「近代家族」以降の親性の変化—親性の「個人化」—を検討した。第1節では、まずベックの「個人化」概念について、その主観的側面と客観的側面とのトータルな把握ができることを大きな特徴として確認した上で、ドイツの家族研究における「個人化」論の受容状況について問題提起を含めた整理を行った。さらに、第2節では、親性を取り上げる理由を以下の2つの背景から検討した。一つは、「パートナーシップと親性との分断」という戦後西ドイツの家族変動という現実的背景であり、もう一つは、「ポスト近代家族」論における親性の理解という理論的背景であり、具体的にはエドワード・ショーターの「ポスト近代家族論」を取り上げ、その意義と限界について論じた。こうした前提を踏まえた上で、親性の分析にとっての「個人化」論の理論的インプリケーションを第3節で考察した。ここでは、「子ども願望」を取り上げ、親性の「個人化」において、個人にとっての親性に対する意味づけが決定的な役割を果たすことを確認した。最後に、親性の「個人化」の分析として「個人化」論の理論的インプリケーションをより発展させていく上で、ギュンター・ブルカルトの「分断化」仮説を取り上げ、親性の決定過程の分析枠組みとして、「分断化」仮説と「個人化」論とを接合する必要があることを確認し、親性の新しい方向性を提示した。

キーワード：ウルリッヒ・ベック、「個人化」論、親性、「子ども願望」、「分断化」、ミリュー

|                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 目次                    | (2) 現実的背景             |
| はじめに                  | (3) 理論的背景             |
| 1. 「個人化」の射程と家族研究      | 3. 「個人化」論における親性       |
| (1) 「個人化」概念の特徴        | (1) 「子ども願望」の歴史的特質     |
| (2) 家族研究における「個人化」論の受容 | (2) 「個人化」と「子ども願望」     |
| 2. ドイツにおける親性研究        | (3) 今日の社会における子どもの位置   |
| (1) 親性概念について          | 4. 親性の「個人化」           |
|                       | (1) 「分断化」：ギュンター・ブルカルト |

\* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

による反仮説

（２）親性の決定過程  
おわりに

### はじめに

ウルリッヒ・ベックの「個人化」論は、ドイツの家族研究において、「近代家族」以降の「新しい」家族のあり方を分析する際にしばしば参照されている。しかし、その受容過程においては、「個人化」概念の把握の仕方が一面的であったり、「個人化」論の理論的射程を十分咀嚼できていない場合が多い。また後述のように、分析の適用範囲も、個人のライフコースの変化やパートナー関係の変化が中心であり、親子関係、とりわけ初期親子関係については、「個人化」論の適用可能性そのものに疑義を呈する論者も存在している。しかし、親子関係は決して「普遍的」ではありえないと思われる。つまり、「個人化」過程を経ることによって、親子関係も新しい関係性を獲得し得るのではないだろうか。「個人化」と親子関係との関連をどのように捉えるのかという研究課題を検討していくために、本稿では、親性—大人の側からの子どもの関係性に対する意味づけ—を取り上げ、母性愛に基づく「近代家族的母—子関係」<sup>1)</sup>に集約されてきた親性の変化、すなわち親性の「個人化」について考察する。

本稿の構成は以下の通りである。まず第１節および第２節では、ベックの「個人化」論の特徴を整理し、ドイツの家族研究における「個人化」論の受容状況について整理を行った上で、親性を取り上げる理論的・現実的背景を明らかにする。その上で、親性の分析視角としての「個人化」論の理論的インプリケーションを第

３節で述べる。第４節では、親性の「個人化」をよりトータルに捉えていくために、「個人化」論批判を展開しているギンター・ブルカルトの「分断化」仮説を取り上げる。

なお本稿では、ベックの「個人化」論を考察の手がかりとするため、ここで用いる「個人化」は、ベックの「個人化」概念を指すものとする。

## １．「個人化」論の射程と家族研究

ベックの「個人化」論は、1986年に出版された『危険社会』によって広く知られるようになり、社会学理論のみならず、青年社会学、家族社会学あるいは政治学といった分野にも大きなインパクトを与えた。同時に、その解釈をめぐる論争は、今日においてもなお衰えることなく続いている<sup>2)</sup>。もっともそのような論争の中身自体は、しばしば「個人化」概念の解釈に「翻弄されて」<sup>3)</sup>いる観もある。しかし、「個人化」は現代の社会変動を捉える際の重要なキーワードであり、社会科学の領域において、今日なお重要な意味をもっていることは否定しえないだろう。

### （１）「個人化」概念の特徴

ベックは、「個人化」を、「グローバル化」と同時並行的に進行する、今日の社会変動の両輪の一つとみなしている。ベックによれば、戦後「社会国家」の下で、人間が生きる上での集合的意味供給源を構成していた国民国家・階級がますます枯渇すると同時に、個人の私的生活において貴重な意味の源泉であった結婚や家族もその有効性を失いつつある。こうした近代固有の伝統的諸価値の崩壊にともなって、個人の生

き方において比重を増すのが個人のニーズおよびそれに基づく個人の選択である。ベックは、「個人化」を、歴史的に所与のものと考えられてきた社会的結びつきからの解放という第一の次元、次に行動や知識、信仰、さらには行動を導く規範が有していた安定性・確実性の喪失という第二の次元、そして第一の次元および第二の次元を経て、社会の中に全く新しい方法でふたたび組み込まれる統制・再統合という第三の次元という3つに分類している。さらにこの3つの次元は、「人々に何が起きているのか」という客観的な変化の側面と、「人々が行動や意識において自分に起きている状況とどうつきあうのか」という主観的側面、2つの側面に区別できる。従来「個人化」が注目される場合、とかく意識やアイデンティティといった主観的な側面、その中でもとりわけ解放や自律性の増大といった次元のみが注目されがちである。それに対してベックは、個人の意図にかかわらず進行する社会変動としての「個人化」を強調すると同時に、社会変動としての「個人化」を媒介とする、主観的側面のレベルにおける不確実性の増大や再統合の次元における「意味づけ」の変化を浮かび上がらせようとしている。このように、「個人化」過程を客観的側面と主観的側面との相互作用としてよりトータルに把握することができるという点に、彼の「個人化」概念の大きな特徴があると思われる。

## (2) 家族研究における「個人化」論の受容

「個人化」論は、旧西ドイツの家族研究の領域において、80年代後半以降、家族変動、とりわけ「近代家族」以降の家族への移行過程の説明変数として受容されてきた。その中でも、エドワード・ショーターを一つの理論的起点と

する<sup>4)</sup>「ポスト近代家族」論／「ポストモダン」家族論は、「個人化」論と多くの視座を共有している。しかし、「ポスト近代家族」論／「ポストモダン家族」論と「個人化」論との関連性を考える場合、「モダニティ」の理解をめぐる理論的問題がある。

そもそも「個人化」とは、「近代化」という非常に長期的な社会変動の一段階であり、その意味で「個人化」は「モダニティ」の枠内における現象である。したがって「ポスト近代家族」論／「ポストモダン家族」論は、「ポスト近代家族」であれば「個人化」論と射程を共有できるが、「ポストモダン」家族という意味では「モダニティ」を超える可能性を含んでいる。この点に関して、例えば高橋秀寿氏は、「ポスト近代家族」を、近代の完遂の過程に位置づけることによって、「近代家族」を「一元的な不完全な『近代家族』」、「ポスト近代家族」を「多様化した完全な『近代家族』」として整理している<sup>5)</sup>。いずれにせよ、「ポスト近代家族」が取り上げられる場合、「モダニティ」概念の解釈をめぐる問題を意識化しないまま論じている場合がしばしばあるため、この点については、十分留意しながら比較検討していく必要がある。

## シングル化

上記の留意点を踏まえた上で、具体的な家族研究における「個人化」論の受容の事例について見ていこう。

まず、家族の「個人化」の一例として、シングルの動向に注目した研究を挙げることができる<sup>6)</sup>。旧西ドイツにおいて、単身世帯は、1970年の550万人から、統一直前の1989年には980万人まで膨れ上がっており、全世帯の3分の1

表1 人数別世帯構成

|       | 総世帯数   | 人数別の内訳 |       |       |       |       | 平 均<br>世 帯<br>人 数 |
|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|-------------------|
|       |        | 1 人    | 2 人   | 3 人   | 4 人   | 5 人以上 |                   |
|       | 1,000  |        |       |       |       |       |                   |
| 1950年 | 16,650 | 3,229  | 4,209 | 3,833 | 2,692 | 2,687 | 2.99              |
| 1961年 | 19,460 | 4,010  | 5,156 | 4,389 | 3,118 | 2,787 | 2.88              |
| 1970年 | 21,991 | 5,527  | 5,959 | 4,314 | 3,351 | 2,839 | 2.74              |
| 1987年 | 26,218 | 8,767  | 7,451 | 4,643 | 3,600 | 1,757 | 2.35              |

資料出所：Statistisches Bundesamt (Hg.), *Statistisches Jahrbuch 1989*, S. 56.

以上を占めるようになった（表1参照）。ベルント・ショファーらは、60歳以下の単身生活者を「シングル」と定義した上で、60年代以降のシングルの増大を、個人化過程の一つのメルクマールとして位置づけている。彼らによれば、従来シングルは、高齢層と若年層、あるいは未亡人といったライフサイクルのプロセスおよび性に起因する現象として捉えられていたのに対して、今日のシングルの増大は幅広い年齢層・階層さらには男性にも浸透している。シングルは、未婚率の高さ、社会的・空間的モビリティの高さ、近代固有の伝統的な連帯構造からの離脱傾向、個人主義的価値嗜好に基づく新しい社会的統合様式に対するニーズといった特徴を有している。これらの特徴の中に、ショファーは、伝統的なライフサイクル過程から切り離される構造的な「個人化」の影響を読みとっている。ショファーは、ベックの「個人化」の3つの次元—「伝統的諸価値からの解放」「確実性の喪失」「再統合」—の「触媒」として、以下のような現実的なモメントを4つ挙げている。

- ・個人の収入の増大
- ・教育に対する要求の普遍化と権利としての固定化

- ・新しい権利をめぐる動向（国家と個人とのクライアント関係の強化）
- ・女性の労働市場への統合

ショファーによれば、収入の増大は、「近代家族」内部の扶養関係を掘り崩し、個人は社会保障制度・労働市場といった社会諸制度と直接結びつけられる。また教育の拡大や社会権を中心とする法整備がこうした傾向をより促進する。したがって「個人化」とは、「標準化」「制度化」の過程でもある。こうした4つの現実的なモメントを媒介として、「個人化」された個人としてのシングルが、特定階層のみならず、あらゆる階層に浸透するとショファーは結論づけている。

#### ポスト・ファミリアルファミリー（Post-familial Family）

エリザベス・ベック＝ゲルンスハイムは、ベックとの共著も多く、「個人化」論をベースとしながら、家族関係や女性のライフコースの問題など、幅広く論じている。ベック＝ゲルンスハイムは、個人のバイオグラフィーにおける「個人化」の特徴を、「ノーマルなバイオグラフィー」から「選択的なバイオグラフィー」への転換として捉えている。伝統的な価値規範の崩壊の裏返しとして、個人の選択可能性が増大す

ると同時に、個人が「主体的」に選択するように強要される(可能性としての決定/リスクとしての決定)。したがって、家族内の構成員間の様々なニーズの調整は困難となり、潜在的なコンフリクトもますます大きくなる<sup>7)</sup>。その結果、共通のニーズに基づいて家族構成員をとりまとめていた「近代家族」にとってかわり、個人が複雑化した調整システムの中心に位置するようになる。こうした観点から、今日の家族変動としての「個人化」は、共通のニーズおよび目標に基づく「近代家族」からの離脱過程として捉えられることとなる。

しかしベック＝ゲルンスハイムは、ベックと同様、こうした家族変動を「シングル社会」への過程と見なす見解にはあくまで否定的である。この点にかかわって、「個人化」論の特徴としてとりわけ重要だと思われるのは、「個人化」過程が家族関係そのものの解体を意味しないという点である。もちろん「近代家族」、とりわけその規範的影響力が消滅するわけではないが、家族形態および規範としての独占的な影響力を失いつつあることは事実である。しかし、シングル社会を主張する人は、家族変動の要因として、個人の自分自身の人生に対するニーズの増大を過度に強調しがちであるとベック＝ゲルンスハイムは指摘している。彼女によれば、たしかに、個人のニーズの意味の増大は「個人化」の一側面ではあるが、「個人化」は同時に「結びつき・近しさ・共同体に対する憧憬」<sup>8)</sup>をも同時にもたらす。したがって、「家族の後に何が来るのか」という問いに対してベック＝ゲルンスハイムは、「シングル」ではなく「家族」と答えている。ここでいう家族とは、境界・継続性・義務的性格など、様々な点において「近代家族」とは全くことなるたぐいの関係

性を指している。これが「個人化」過程の「再統合」の地平に構想しうる新しい家族のあり方、彼女が言うところの「ポストファミリアルファミリー」<sup>9)</sup>の輪郭である。この「ポストファミリアルファミリー」は個人の自律と共生との「緊張関係」によって特徴づけられるがゆえに、その輪郭はいまだ不明瞭である。

「個人化」はあらゆる私的な人間関係に浸透する。パートナー関係の「個人化」は、ベック＝ゲルンスハイムも含め、家族変動の事例としてよく取り上げられているが、親子関係も例外ではあり得ない。しかし、親子関係の「個人化」については、「ポストファミリアル・ファミリー」においても十分展開できているとはいえない。以下、本稿では、親子関係の「個人化」を検討するひとつの手がかりとして、親性を取り上げてみたい。

## 2. ドイツにおける親性研究

### (1)「親性」概念について

親性の「個人化」に関する基本的問いを、ライナー・ミュンツは、「なぜ個人化された社会において、いまだにそれほど子どもをもちたがるのか」という、親の側からの子供を持つ「意味づけ」の問題として設定している<sup>10)</sup>。

「親性」はドイツ語の Elternschaft の訳語であり、英語の Parenthood と同義語にあたる。日本語の「親性」という概念は、「育児性」や「次世代育成力」と同様、「母性/父性」に対するオルタナティブとして頻繁に用いられる。しかし Elternschaft は、日本語から連想されるような子育てをめぐる個人の資質や能力という意味合いよりも、むしろ大人の側から見た子どもとの関係性(親になること)、あるいは親子関

係を指す場合が多い。本稿では、「個人化」の分析次元にも示されているように、今日の人間関係を理解する上で、その関係に対する個人の主観的な意味づけの側面が重要になっているという点を踏まえ、親の側から意味づけられた子どもとの関係性という意味で、親性という概念を用いる。

ではなぜ親性に注目するのか。この点について、ドイツの現実的背景と理論的背景の双方から検討してみたい。

## （２）現実的背景

まず、親性に注目する現実的背景として、旧西ドイツにおける60年代末以降の家族変動、すなわち「個人化」過程における「パートナーシップと親性との分断」<sup>11)</sup>の進行を指摘することができる。

例えばヘーゲルは、子どもによって夫婦の一体性が顕現すると考えていたように、家族を構成する大きな二つの要素、パートナーシップ（夫婦関係）と親性（親子関係）は、「近代家族」において密接に結合していた。第二次世界大戦後、安定的な経済成長に支えられながら、実質収入・居住環境・生活水準が改善される中で、「近代家族」は、階層特有のものとしてではなく、家族形態としても規範としても広くドイツ社会に浸透した。このように、1950年代から60年代をドイツでの「近代家族」の「黄金期」と見なすのが一般的理解となっているが、「近代家族」は、60年代末以降の反権威主義運動の中で転換を迫られる。この家族変動は、「近代家族」への「個人化」原理の浸透であり、その一側面として、「パートナーシップと親性の分断」がその特徴として指摘されている<sup>12)</sup>。これは「近代家族」の枠内で維持されてきたパー

トナーシップと親性との連結が切り離され、それぞれ独自の発展を遂げることを意味する。

パートナーシップの「個人化」によって、パートナー関係は、情緒的結びつきに対する個人の選択の問題となり、不安定な関係と化する。それによって、ますますパートナー関係の「質」が、個人の選択においても重要な問題として浮上するようになる。そしてパートナー関係の「個人化」は、「近代家族」の形成基盤の中核としてのパートナーシップの意義を掘り崩すようになる。連邦統計庁によれば、法律上の婚姻手続きをとらない「非婚生活共同体（nichteheliche Lebensgemeinschaft）」が、1972年には13万7千組であったのに対し、88年には82万組へと急増していることは、パートナーシップの「個人化」の典型的な例と見なされている。

しかしその一方で、非婚生活共同体を子どもの有無の内訳から見てみると、子どもをもっていない割合が非常に高いことも指摘できる。実数としては有子非婚生活共同体は一貫して増加傾向にあるが、1972年の13万7千の非婚生活共同体のうち、子供を持たないカップルの占める割合は80%強であり、これが88年の時点では90%とさらに多くなっている。また、有子非婚生活共同体のほとんどが、離婚後新たに形成されたステップファミリーであるという指摘もある<sup>13)</sup>。ここには、政策上の誘導も大きく作用していると思われるが、家族形成の過程において、パートナーシップおよび親性がそれぞれ独自の意味づけを必要としつつあると同時に、家族形成の基盤として親性により高い位置づけが与えられる傾向にある。つまり、今日、家族変動過程において、一つの家族形成の基盤として、子どものしめる比重が大きくなりつつある

といえる<sup>14)</sup>。

こうした家族変動が、親性がパートナーシップと切り離され独立した形で注目されるようになる現実的背景である。しかしこのことは同時に、親性が「個人化」過程とどのような関連にあるのかという理論的課題を提起することにつながっていく。

### (3) 理論的背景

従来の親性研究において、親性の「個人化」との関連で重要だと思われるのは、母性愛に典型的に示されているように、親性を子どもとの普遍的・本質主義的な関係として捉えようとする理解である。こうした親性の理解は、初期親子関係を「近代家族」との連続性において捉える考え方に共通しており、こうした理解は「ポスト近代家族」論の中にも垣間見られる。ここでは、「ポスト近代家族」論の先駆者として位置づけられているショーターを取り上げ、ショーターが展開している「ポスト近代家族」論の全体的な構成と、その中での初期親子関係の位置について検討する。

ショーターは、1989年の論文の中で、出生率の低下をめぐるアプローチとして、統計学的アプローチと近代化理論によるアプローチに対置する形で、「ポスト近代家族」論を位置づけている<sup>15)</sup>。1960年代後半以降の出生率の低下は、統計学的アプローチでは「第二の人口転換」と呼ばれている。しかしショーターによれば、統計学的アプローチでは、出生率の低下と他の社会的事象との関連性が軽視されている点や死亡率の低下との関連が説明できない点という問題点がある。また近代化(産業化・都市化)の一環として出生率の低下を捉える近代化理論の場合は、第一の人口転換と第二の人口転換の差異

の説明が十分ではないとされる。では、この二つのアプローチに対置されているショーターの「ポスト近代家族」論の輪郭とはいかなるものだろうか。

ショーターは、「ポスト近代家族」について、以下の3つのメルクマールに即してその特徴を整理している。

- ①家族の境界と境界を超越して作用する環境との関係性における量と質
- ②家族内部における個々の構成要素の質
- ③構成要素の相互作用

まず第一の点についてであるが、ショーターによれば、「ポスト近代家族」は、「伝統的家族」および「近代家族」との比較において、時間および空間を軸とする外的環境との関係性がますます希薄化するとされる。家族を固定化する時間および空間との結びつきが強力であった「伝統的家族」と比べて、「近代家族」は空間との結びつき(とりわけ近隣共同体との関係)が弱まる一方、時間との結びつき(世代継承)は維持されている。それに対して、「ポスト近代家族」への移行は、時間による固定すら失い、非常に不安定なものとならざるを得ないと考えている。

また第二の点について、「ポスト近代家族」におけるパートナー関係において、セクシュアリティのしめる比重が大きくなる点が指摘されている。

「伝統的家族は家族全体の利害を最大限追求したのに対して、『近代家族』は家族内の個人的幸福(personliches Glück)を最大限にすることを追求した。これが『ポスト近代家族』では、家族の内々(傍点は筆者)の“関係”における個人的幸福を最大限にすることを追求している」<sup>16)</sup>

ショーターは「関係」の本質を、「あらゆる制度的強制の外側での人格的発達、自己実現の可能性」<sup>17)</sup>に見ている。このロジックに即して、ショーターは、「ポスト近代家族」における新しい親性を「パートナー関係の自己実現」のひとつのあり方として捉えている。つまり「ポスト近代家族」では、子供を持つことのポジティブな側面とネガティブな側面とを区別した上で、個人が情緒的資本を中心とするポジティブなモメントを見いだせるか見いだせないかが決定的な要因となるとされる。こうした理解は、後述する「個人化」論における親性の理解とほぼ一致している。しかし、ショーターの「ポスト近代家族」論と「個人化」論との相違点は、初期親子関係の理解にある。

ショーターは、「ポストモダン家族」の第三の特徴として挙げている家族内部の構成要素の相互作用に関して、パートナー関係とその他の構成要素との相互関係という観点から、親子関係の変化に注目している。彼は子どもをめぐる関係性について、親を通じて身体化された文化の影響力の低下と家族外の社会諸集団（「同輩集団」やマスメディア）の影響力の増大から、親子関係はますます緩やかな関係性へと変化するとしている。しかし、こうした変化が該当するのは青年期を中心とする親子関係であり、初期親子関係については、むしろ「近代家族」と変わらず緊密な母性愛によって特徴づけられるとされている。こうした初期親子関係の理解は、まさに「ポスト近代家族」論との理論的断絶と言っても過言ではない。

ショーターの理解に典型的に示されているように、初期親子関係（とりわけ母子関係）については依然として「近代家族」の延長線上に捉える傾向がある<sup>18)</sup>。しかし、「個人化」はあら

ゆる人間諸関係に浸透する社会変動であるという点を踏まえるならば、「個人化」論を家族研究に応用していく上で、親性の「個人化」という問題をいかに構想しうかが一つの重要な理論的課題となっていると言える。次節では、「個人化」論に立ち戻り、そこから読み取り得る親性の「個人化」に対する「個人化」論のインプリケーションを検討したい。

### 3. 「個人化」論における親性

「個人化」論のコンテキストの中で親性の「個人化」を考える場合、「個人化」の主観的側面、すなわち個人にとっての親性に対する意味づけの問題が浮上する。

エリザベス・ベック＝ゲルンスハイムは、特に母子関係を取り上げ、女性のライフコースの変化、すなわち女性の「個人化」との関連において、親にとっての子どもをもつことの意味変容について考察している。その際、今日の親性を特徴づけるキーワードとして、「子ども願望（Kinderwunsch）」—個人が子どもをほしいと思うかどうか—を挙げている。以下では、「子ども願望」を中心としながら、親性の「個人化」にとって「個人化」論がもっている理論的インプリケーションについて検討する。

#### （1）「子ども願望」の歴史的特質

旧西ドイツにおいて「子ども願望」が公の場での議論の対象となり、盛んに記述されるようになったのは、出生率の低下と時期を同じくしており、その意味では「子ども願望」は歴史的に見て比較的新しい「社会現象」として位置づけられている<sup>19)</sup>。そもそも「子ども願望」は、心理学の分野で用いられてきた概念であるが、

出生率の低下のみならず、近年の生殖技術の発展、とりわけ不妊治療との関連で、より広い分野で頻繁に用いられるようになってきた。しかし、この概念の起源やその影響力、とりわけ心理学から社会学への応用過程などについては、まだ十分研究が進んでいるとは言い難い<sup>20)</sup>。したがってここで扱うのは、「個人化」過程における「子ども願望」の形成過程とその意義に限定したい。

すでに80年代初頭から「子ども願望」に注目していたバーバラ・ジヒターマンは、「子ども願望」が意識化されるのは、避妊手段としてのピルの普及と密接に関連していると指摘している。ジヒターマンによれば、避妊手段がまだ十分浸透していない「近代家族」の成立期においては、子どもは「授かる」ものであり、こうした発想には宗教的世界観が色濃く反映されていた。「近代家族」は、男性と女性との「対照的な美德」(ハバーマス)に基づく相互補完関係の上に成立しており、女性のライフコースは、結婚および母親になること直結していた。母性愛による子どもの養育は、女性の人生目標および人生の課題であった。男性は労働市場によって自立を要求されるのに対して、女性は家事および育児によって自立の自重・放棄を余儀なくされた。

「すなわち再生産は暗黙の義務であり、それは同時に多くの女性が身を滅ぼしてしまうほどの義務であった。これは、時には子どもに対する愛情によって部分的に和らげられ、部分的に隠蔽される義務であった。人々は当たり前のように子供をもうけ、時には静かに喜び、時には沈黙し、時には無言の絶望に陥ることもあった」<sup>21)</sup>

ジヒターマンによれば、「近代家族」の中での親性、子どもを持つことの意味は、—男性にとっても、女性にとってはより強く—宗教的・社会的規範の実現という意味合いが大きく、自発的な選択肢はほとんどなかった。唯一残されている選択とは、修道士・修道女になって、あらゆるセクシュアリティを断念することだけであつたと考えられている。

このような結婚および家族の中に埋め込まれた親性に最初の変化が現れるのが、世紀転換期だと考えられている。世紀転換期に、初めて個人的な動機としての「子ども願望」が登場するが、しかしそれは非常に限定的であり「階級格差」によって特徴づけられていた。世紀転換期は、第一次女性運動の興隆期であり、ドイツでも19世紀後半に女性運動の萌芽が形成され、この時期に最盛期を迎えるが、ここには2つの大きな潮流があった。一つは、教養市民層の女性を中心とするブルジョア女性運動であり、ここでは母親役割を媒介とした女性の経済的・政治的地位の保障が強調される。もう一方はプロレタリア女性運動であるが、この運動の中で、妻であり母であり労働者でもあった女性たちが、母親役割を負担と見なし、出産制限に大きな関心を示したのである。すなわち、「もっと子どもがほしいかどうか」ということが、プロレタリア女性にとって極めて深刻な問題となった。しかし当時女性運動において問題にされたのは子どもの数の問題だけであって、子どもを持つことそれ自体に対する問いではなかった。その意味では、ほとんどの女性にとって子どもを産むことは疑問の余地などない、自明のことと見なされていたと言える。親性が、集合的価値規範・伝統・自然への依存によって決定されていた現象から、子どもとの関係性に対する主

体的な選択，自己のセクシュアリティの実現に関わる問題へと転換するのは戦後以降，とりわけピルの普及以降であるとジヒターマンは結論づけている。

## （２）「個人化」と「子ども願望」

しかしジヒターマンの議論は、なぜ「個人化」された社会において子どもをもちたがるのかという、「子ども願望」が登場する社会的背景に対する答えとしては十分とは言い難い。ジヒターマンが避妊技術との関連性で「子ども願望」の成立過程にアプローチしたのに対して、ベック＝ゲルンスハイムは、「個人化」過程において「子ども願望」が登場する背景とその意義を明らかにしている。彼女は今日の「子ども願望」の特徴を、女性ライフコースとの関連性，とりわけ自立と子どもとの葛藤として位置づけている。

戦後旧西ドイツにおいて、「近代家族」の黄金期以降，女性は，ライフコースにおいて新しい可能性を手に入れた。ベック＝ゲルンスハイムは，この変化を「他者のための存在」から「少しは自分自身の人生」への移行と捉えている<sup>22)</sup>。これは，従来男性にしか適用されてこなかった「個人化」原理が女性にも浸透したことを意味している。「個人化」とは，女性が個人として独自のニーズをもつ自律的存在となり，従来他律的に規定されてきた女性をめぐる人間諸関係が，女性自身のニーズに基づく関係性に変化することを意味している。換言すれば女性の「個人化」は，女性にこれまでは想像もできなかった「選択の可能性」を提供する。とりわけ労働市場への参入は，女性の「近代家族」からの離脱，すなわち母親役割からの離脱を促進する。

女性の「個人化」は，女性が「自分の人生」という新しいチャンスを獲得する過程であると同時に，「個人化」の影の側面としての「貧困の女性化」（劣悪な労働条件，低い賃金など）の過程でもある。従来，家族という枠の内である程度緩和されてきた社会的不平等の問題が，「個人化」によって直接個人に突きつけられるようになる。女性は，相変わらず男性よりも家事・育児に対してより多くの責任を受け負っており，労働市場や仕事でも男性との比較において保護されているとは言い難い。したがって女性のライフコースの「個人化」は，これまで経験してこなかった不平等・コンフリクト・強制をもたらす。これが女性の「個人化」が「不完全な個人化」と言われるゆえんである。

従来夫や子どもの存在と結びつけられていた女性にとって，「個人化」過程において生きる上での選択肢が拡大することによって，またこのことが生殖技術の発展を後押しすることによって，技術面でも社会的規範という点でも，子どもをもたない可能性がいっそう広がる。すなわち，女性が従来のように夫や子どもに拘束されない，独自のニーズをもつ存在となることによって，夫や子どもとの関係性は大きな転換点を迎える。「個人化」の徹底によって，個人にとって子どもを持つことは大きな負荷にもなり得る。とりわけ労働市場において安価な労働力として位置づけられやすい女性にとって，経済的自立を達成しようとする場合に，子どもという存在は障害にならざるを得ない。このことは，子どもを持つことが願望になると同時に疑問ともなり得ることを意味している。では，なぜ子どもをほしがするのか。まさにこの問いの成立自体が，親性が個人の問題，すなわち「子ども願望」の問題へと転換したことを示している。

ここで注目すべきは、「個人化」によって子どもを持つという選択肢がより達成困難なものになることで、逆説的に個人にとっての子どもの意義が高まるという「個人化」の論理である。「個人化」が社会の隅々にまで浸透し、目的合理的関係・競争・キャリア・モビリティといった規律に支配される構造が拡大し、それによって個人のライフコースがますます不確実性によって支配されるようになればなるほど、逆説的に他者との結びつき、とりわけ情緒的結びつきが希求される。ここにはパートナー関係も、子どもとの関係も含まれるが、とりわけ子どもは大人の側にとってますます非打算的な感情を投入することができる関係性として認識されるようになる。ベック＝ゲルンスハイムは、今日の「子ども願望」の特徴として、職業世界に対置される配慮・親密性といった感情に裏打ちされた「人格的成長」という規準を提起している。この規準は、女性が独自のニーズをもつ自律的存在として立ち現れてはじめて採用される。これが、「個人化を経た親性」としての「子ども願望」の今日的特性である。すなわち「子ども願望」の形成は、女性の「個人化」を媒介とすることによって、自立の自重としての女性役割・母親役割に内包されていた親性からの大きな転換点としての意味を獲得する。この個人を中心とする親性に対する意味づけへの転換こそが、「個人化」論からみた親性の「個人化」にとっての最も重要なインプリケーションである。

## (2) 今日の社会における子どもの位置

「子ども願望」という観点から親性の「個人化」を捉える考え方は、アンソニー・ギデンズの「親密な関係性」<sup>23)</sup>と、多くの点で共通点を

もっている。ギデンズのいう「親密な関係性」とは、「対等な人間同士による人格的絆の交流」であり、このことは「対人関係の領域の民主化」の可能性を内包している。この過程において、人間関係の質(「純粋な関係性」)が重視されるようになる。ギデンズの「親密な関係性」では、パートナー関係と親子関係の両方が対象となっている。では、なぜ「個人化」論ではあえて子どもとの関係性がクローズアップされるのだろうか。

その背景には、今日の社会における子どもの位置という問題があると思われる。この点に関して、ベック＝ゲルンスハイムは、子どもの側で生じている変化とりわけ子どもの養育および教育をめぐる変化に注目している。

この変化について、まず、ボウルヴィあるいはウィニコットに代表される発達心理学の影響を指摘することができる。発達心理学によって、初期母子関係の質あるいは情緒的結びつきの重要性が強調される結果となった。さらに、歴史上類を見ない「教育の圧力」<sup>24)</sup>によって、子どもを一個の独立した人格と見なす考え方がますます強まり、「子どもの福祉(well-being)」という名目の下に、子どもをめぐる複雑な知の網の目が編成される。そのことによって子どもに関わる仕事に対する物理的・精神的要求はますますエスカレートする。しかしこの仕事は、子育てに関わる人間の個人としての自立に対するニーズと必然的に衝突せざるを得ない。つまり子どもをめぐる物理的・精神的責任の増大は、新たな負荷の創出を意味している<sup>25)</sup>。しかしその一方で、まさにこの新しい責任を通じて、子どものための仕事は行うに値する意味を獲得し、その社会的価値も上昇すると考えられる。つまり、子どもとの関係性が、それに携わる者

にとって、満足・自意識・自己確認の源泉ともなる。

子どもに対する関心の高まりと表裏関係にある高度産業社会では、効率性、業績、時間的正確さ、予測可能性、秩序の速やかな浸透が求められる。こうした構造的要請が、非合理的存在としての子どもに対する教育関心を煽る要因となっている。したがって、今日子どもの養育に携わる人間は、それは従来女性が担ってきたが、うまくかみ合わない二つの世界、すなわち徹底的に合理化された社会と非合理的な存在としての子どもの世界とを調整し、そのバランスを維持しつづけなければならない。しかもより重要な点は、「両者の根深い対立を調整作業によって克服する必要があるばかりではなく、さらに積極的にこの対立と向き合う必要がある」<sup>26)</sup>という指摘である。

「今日子どもを持つということは、特に女性たちにとって、まさしく近代の理想像を形成する要素、自分自身を中心に据え、自由・独立をモットーとする積極的な人生計画を断念することなのである。近代社会が教育制度や消費生活や家族法や老人福祉など多くの分野で『自分自身の生活』に対する脅迫・欲求・期待を生み出し推進すればするほど、その結果は必然的に子どもに対する絆や責任の内容と真っ向から対立」せざるを得ない。つまり、「子育てに携わる者は、高度産業社会の生活条件に即してではなく、むしろ多くの点でこうした社会のあり方に対抗してしか子どもに関わる仕事を遂行できない」<sup>27)</sup>のである。この点こそ、「個人化」過程における「子ども願望」がもつラディカルな側面であり、子どもとの関係性の中に含まれる「ケア」の問題として、改めて位置づけることができると思われる。つまりこのことは、「子

ども願望」が、「ケアの倫理」(キャロル・ギリガン)に代表されるようなオルタナティブな社会のあり方をも構想しうる可能性をもっていることを示唆していると思われる。例えばマイケル・ハートは、「情動にかかわる労働 (affective Labor)」という概念を用いて、高度産業社会におけるケア労働のもつ意義を次のように語っている。

「この労働は非物質的なものである。というのは、それが身体にかかわるものであれ感情にかかわるものであれ、その生産物 (安心の感情や幸福感、満足、興奮、情熱、あるいは深い関わりの意識や、共同体の感情といったもの) には手で触れることができないからである。人間の内部に向けられたサービス、あるいは親密さのサービスといった範疇が、この種の労働に適應される。しかし、この労働にとって本質的なのは、その『人間の内部に向けられた』局面であり、情動の創造と操作そのものなのである。このような情動の生産と交換、コミュニケーションは、一般的に言って、人間の出会い、つまり現実の他者の存在に結びついたものである。...

情動にかかわる労働が生み出すのは、社会的ネットワークであり、もろもろの共同体の形態であり、パイオパワーなのである」<sup>28)</sup>

ハートは、近代における労働および分業のヒエラルヒー、そしてこのヒエラルヒーに対応した人間諸関係のあり方の見直しとして、「情動にかかわる労働」によって形成された社会ネットワークを、業績主義・効率性を優先させてきた社会に対するオルタナティブとして位置づけている。この点は、今日の子どもをめぐる人間諸関係の社会的位置を考えるにあたって非常に示唆的であると思われる。

しかし、子どもとの関係性の中にあるケアという問題、そこに含まれている可能性は、同時

に子どもとの関係の非対称性をテコとする支配関係と隣り合わせであることも忘れてはならない。すなわち、親性への新しい意味づけとしての「子ども願望」は、可能性と危険性の両方を含むアンビバレントなものであると言わざるを得ない。こうした可能性と危険性両方の射程を含む子どもをめぐる関係性の考察は、今後の重要な研究課題と言えるだろう。

本節では、親性「個人化」に対する「個人化」論のインプリケーションとして、親性に対する個人の意味づけとしての「子ども願望」がとりわけ重要になることを確認した。しかし「子ども願望」は、社会的な文脈から切り離された個人の意思のみによって形成されるものではない。現実の親性への意味づけは、個人的な願望だけではなく、願望の背景にある個人のバイオグラフィー、他者との関係性、さらには社会諸制度とのコンフリクト・妥協から構成される複雑な複合体として捉えられなければならない。つまり、子どもを持つことが大きな負荷ともなる今日の社会では、親性の決定過程において、「子ども願望」のみならず、願望の障害ともなる様々なレベルの社会的諸条件も重要なファクターとして作用する。次節では、親性の「個人化」をよりトータルに捉えていくために、親性の決定過程に焦点をあて、その分析枠組みについて検討する。

#### 4. 親性の「個人化」

##### (1) 「分断化」：ギュンター・ブルカルトによる反仮説

ギュンター・ブルカルトは、構造的強制と個人の自律的決定という、社会学の根本問題についての理論的かつ経験的検討という観点から、

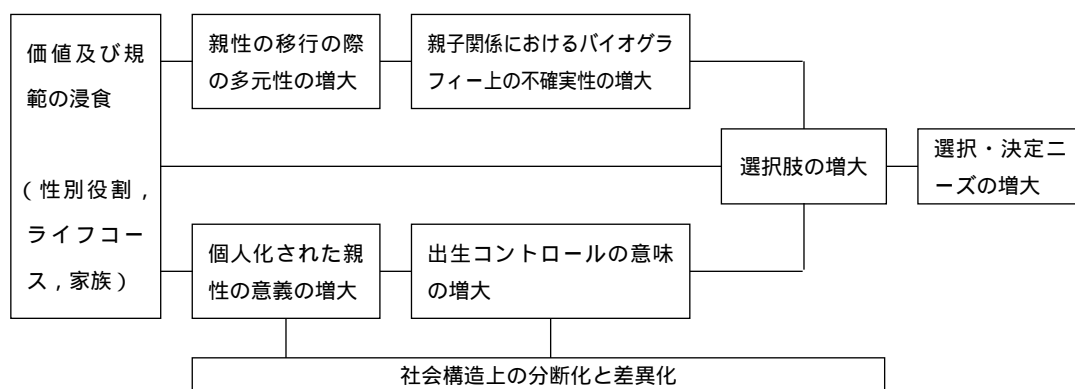
親性の問題を取り上げている。具体的には、親性の決定過程において、「個人の自律的決定とバイオグラフィー上の強制や社会的・文化的自明性とがどのような連関を構成しているか」<sup>29)</sup>、また「親性の決定過程においてどの程度自律的決定をなしえているか、あるいは社会集団によってどのような違いがあるか」を明らかにすることが企図されている。彼は、親性の決定過程に関するアプローチのひとつとして、「個人化」論と「合理的選択」理論<sup>30)</sup>を取り上げ、その普遍性要求に対する異議申し立て、および歴史的・経験的批判という二つの点から、批判を行っている。ここでは、ブルカルトの「個人化」論に対する批判を参照しながら、親性の「個人化」のトータルな把握への手がかりとして、親性の決定過程の分析枠組みについて検討する。

ブルカルトは、「個人化」の特徴を個人の選択可能性の増大として捉えた上で、親性の「個人化」に関する3つの仮説を引き出している。

- ①子どもを持たないことはもはやアノミーではない
- ②第一子出産時の年齢範囲はますます拡大する(年齢規範の解体)
- ③家族規模(子ども数)がますます任意となる

そして彼は、ドイツよりも個人主義が徹底しているアメリカを取り上げ、親性の「個人化」の進行の度合いを経験的データから検討することによって、「個人化」論の負荷力を検証した(図1参照)。

まず第一の仮説については、ブルカルトは、子供を持たない選択よりも「親性の延期」をより本質的な特徴と見なしている。同時に、第一次ベビーブーム期の出生コーホートに属する女性における無子率の低さを、むしろ特殊な傾向



資料出所：Günter Burkart, Individualisierung und Elternschaft - Das Beispiel USA, in: *Zeitschrift für Soziologie*, Jg. 22, Heft 3, 1993, S. 161.

図1 親性の個人化

として指摘している。また、第二の仮説についても、第一子出産年齢に関する規範（19歳～25歳）の浸透は第一次ベビーブーム期という特定の出生コーホートでのみ確認できるものであり、長期的な出生コーホート別の変遷を見た場合、特定の出生コーホートにおける均質性の高さの方がむしろ逸脱と見なしうるとブルカルトは指摘している。さらに第三の子ども数に関する仮説についても、家族規模の縮小というよりもむしろ多子家族の割合の減少および1～2人の子ども数への集中として捉えられるべきであるとしている。とりわけアメリカにおいて3人以上子どもがいる家族は、20.5%（1960年）から9.8%（1988年）へと半数以下に減少している。以上のことから、ブルカルトは、子供を持つことが普遍的でなくなり無子率が上昇するという「親性の個人化」仮説は、非常に短いスパンに焦点を当てているために、出生コーホート別の比較という観点から見て承認できないと結論づけている<sup>31)</sup>。

また、親性に関する意識的決定という点について、ブルカルトは、意識的選択が可能となる

のは、経済的に他者への依存を必要としないごく少数の高い教育を受けた女性に限られているとしている。さらに彼は、避妊技術の普及の高さにもかかわらず、一定数存在する妊娠の際の無計画性、あるいは前近代における出生コントロールの存在などから、今日子供をもつという決定が、「個人化」論や「合理的選択」理論が想定しているようなコスト・利益の計算に基づく結果とは言い難いとしている。彼は自ら行ったインタビュー調査から、ほとんどの女性が、子供を持つのにふさわしい時期がいつなのかという問題について、明確な見通しをもっているわけではなく、しばしば問題を偶然性という運命に委ねてしまっている<sup>32)</sup>。

親性の「個人化」の検証の結論として、ブルカルトは、親性の「個人化」過程は、あらゆる社会階層において確認することはできないとしている。彼によれば、子どもをめぐる決定は、様々な構造的諸条件に媒介された利用可能な選択肢によって制約を受けざるを得ない。すなわち多くの人々は、様々な選択肢ではなく、むしろ構造的強制の下で特定の選択に誘導されるの

表2 親性の決定過程における要因(親性への移行過程, 時期, 子ども数)

|             | 基本的な親性                                                                      | 時期(年齢)        | 子ども数                     |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------------|---------------|--------------------------|
| 決定が依拠しているもの | 親性の価値 vs 子なしの価値                                                             | 教育及び職業: 親性の延期 | 第一子出産の年齢                 |
|             | 親性による犠牲 vs 子なしによる犠牲                                                         | パートナーシップ      | さらなる子どもによる犠牲と価値          |
|             |                                                                             | 生物学的・社会的年齢制限  | 兄弟姉妹の価値に関する親の「考え方」       |
|             | 価値/犠牲が依拠するもの: 利用可能な選択肢<br>(職業教育・職業),<br>パートナーシップ,<br>期待される援助,<br>「良き人生」とは何か |               | 親の生殖能力<br><br>パートナーシップの質 |

資料出所: Günter Burkart, *Die Entscheidung zur Elternschaft: eine empirische Kritik von Individualisierungs und Rational-Choice-Theorien*, F. Enke, 1994, S. 251

である。親性の決定過程において、主体的な選択が可能なのは、白人の高い教育を受けた特定の層のみであり、選択が困難な集団との「構造的断絶」「差異化」が進行、さらには深刻化しつつあるとブルカルトは強調する<sup>33)</sup>。そして調査結果から、「個人化された」集団(白人・高学歴・高収入)と、構造的強制によってその選択が拘束されている「家族主義的」集団(黒人・低学歴・低収入)との「二極分化」こそが、今日のアメリカの親性の決定をめぐる大きな特徴であると締めくくっている。

## (2) 親性の決定過程

ブルカルトの「個人化」論批判は、親性の「個人化」という問題を考えるにあたって、どのような意義があるだろうか。ここでは、この問題を親性の決定過程という点から考察する。

自らの経験的検証を踏まえて、ブルカルトは、親性の決定過程において「個人化」を確認できるのはごくわずかな集団に限られており、ほと

んどの場合には決定の際のさまざまな条件、すなわち「構造的強制」が決定過程において重要な役割を果たしているを見なしている。「構造的強制」には、一般的な構造的諸条件(教育システム、労働市場の構造、両性関係、家族・子なし・「良き人生」の定義に関する文化的に正当化されたイメージ)のみならず、具体的な個人を取り巻く条件、すなわち階層属性、教育資本、接近可能な社会的支援ネットワーク、バイオグラフィー上の位置などが想定されている<sup>34)</sup>。これらの諸条件が非常に複雑に絡み合うなかで、親性の決定は方向づけられている(表2参照)。したがって、ブルカルトに言わせれば、親性の決定とは「子ども願望」に基づく個人の自律的な決定とは全く別物である<sup>35)</sup>。

「個人化」論あるいは「合理的選択」理論に共通する個人の「決定」を中心するアプローチをめぐって、ブルカルトは、決定概念の明確化を今後の重要な社会学の理論的研究課題として提起している。「個人化」論が展開する選択の

可能性とリスクという「ジレンマ」や「両義性」だけでは、構造的強制との関係、個人の決定過程におけるバイオグラフィー上の様々な背景、さらには相互行為による作用との関係など、トータルに親性の決定過程を分析していく上で不十分であるとしている<sup>36)</sup>。

以上のような、ブルカルトの経験的検証および理論的課題提起は、非常に示唆に富んでいるが、「分極化」仮説が「個人化」論批判として展開されたことによって、理論的な問題も孕んでいると思われる。すなわち、「個人化」論が親性の「個人化」の一側面として個人にとっての「意味づけ」の重要性を強調することは、ブルカルトの議論と決して矛盾するものではなく、むしろ「分断化」仮説は、親性の「個人化」をトータルに捉えていく上で、「個人化」論を豊富化し得るものとして位置づけることができるように思われる。

「分断化」仮説は、親性の決定過程における「構造的強制」に左右されることなく意識的決定が可能である社会集団と、逆に「構造的強制」に身を委ねざるを得ない社会集団との「二極分化」を表している。しかし、ベックおよびベック＝ゲルンスハイムも指摘している<sup>37)</sup>ように、「構造的強制」に拘束される「制度化」と「個人化」とを二律背反的に捉えてしまうことによって、逆に、ブルカルト自身が提起した親性の決定過程の射程が十分に活用されていないように思われる。換言すれば、ブルカルトが「個人化」論批判の論拠として用いた「構造的強制」は、むしろ「個人化」論の中心にある。つまり、あらゆる個人は、福祉国家・労働市場・教育システムといった一般的社会的諸条件、さらには個人のバイオグラフィー、あるいはパートナーを含む人間諸関係における相互行為を媒介とし

て、親性の決定を特定の方向に誘導されるのである。しかし、こうした親性の決定過程において決定的に重要になるのは、従来階層あるいは階級によって担われてきた諸要因の調整・再統合の機能が、個人にとって代わるという点である<sup>38)</sup>。すなわち、個別具体的なバイオグラフィー、さらには個人の教育や職業といった諸条件、ひいては社会制度といった多元的なレベルの諸要因の調整およびそれに対する意味づけがあくまでも個人の問題として登場することに、今日の親性の「個人化」の特徴がある。したがって、親性の決定過程において、いくら個人が仕事とパートナー関係と子どもをすべて望んでいるとしても、それは常に「不完全なコンビネーション」にならざるを得ないのである。つまり親性の「個人化」をトータルに把握するためには、ブルカルトのようなゼロサム的な発想ではなく、主観的要因と客観的要因とが複雑に絡み合ったパターン編成から構成される親性の決定過程についてのホリスティックな分析枠組みを用意しなければならない。そのためには、「個人化」論から読み取り得る理論的インプリケーション—個人を調整の中核とする親性の決定過程、その際の「子ども願望」に示されているような個人にとっての「意味づけ」の重要性—と、ブルカルトが強調した多元的なレベルにおける「構造的強制」とが、親性の決定過程の分析枠組みとして相互補完的に接合されなければならない。両者の議論を射程に入れることによって、はじめて、親性の「個人化」のトータルな把握が可能になるのである。「個人化」論と「分断化」仮説との接合の仕方、ひいては親性の決定過程についてのホリスティックな分析枠組みの構築は、今後の重要な研究課題であるが、最後に、こうした接合の一つの理論的な可能性とし

て、主観的要因も組み込んだ社会変動論としての「価値転換」研究、「ミリュー」研究を取り上げたい。

ドイツの「価値転換」研究は、ロナルド・イングルハートの研究に端を発している。イングルハートの研究を批判的に継承し、ドイツの社会分析に用いたヘルムート・クラークスによれば、今日の親性は「義務価値」から「自己実現価値」への転換として捉えられる<sup>39)</sup>。しかしこの価値転換は、イングルハートの理論的問題点としても指摘されていることであるが、一方向的・不可逆的な変化ではあり得ない。こうした批判を踏まえ、価値転換のあり方をより精緻化して、今日の多様なライフスタイルを分析しようと試みているのが「ミリュー」研究である。

高橋秀寿氏によれば、ミリューとは、「職業と職場、教育水準、収入や居住、地域などの生活状況、世代、年齢、宗派といった『客観的な』生活・社会条件と、価値観や意味・コミュニケーション関係、美的趣味、消費・モード志向、政治やその制度への立場といった『主観的』な内的態度、およびその相互影響によって構成された文化的な社会集団」<sup>40)</sup>と定義されている。従来ドイツ社会は、階級と宗派の分断に基づくミリュー構造を保持していたのに対して、第二次世界大戦以降、とりわけ宗派の重要性は低下し、それに代わって、世代や年齢に規定された価値志向が大きな影響力を持ち始める。また、経済関係を軸として形成されてきた社会のコンフリクトライン(クリーヴィッジ)が断片化し、思考・行動様式や生活スタイルが客観的な生活構造から相対的に自律することによって、ミリューは、階級・階層の分岐ラインに沿ってではなく、相対的に自律した主観的な要因によって構造化されるようになる<sup>41)</sup>。ミリュー研究は、

日本でも、政治学、とりわけ政党の支持基盤分析の手法として注目されており、同一階層内での異なる価値志向をもったミリューのカテゴリー化などが試みられている。この分類をそのまま親性の分析に応用することはできないが、今後、親性の決定過程を、階層のみならず世代や価値観などの複合的編成としてより詳細に構想していくうえでも、「ミリュー研究」は注目に値するといえるだろう。

### おわりに

本稿では、「近代家族」以降の家族のあり方を考える一つの考察として、親性—大人の側からの子どもとの関係性との関係性に対する意味づけ—取り上げ、母性愛に基づく「近代家族的母・子関係」に集約されてきた親性の変化、すなわち親性の「個人化」について、ベックの「個人化」論を手がかりとしながら検討した。最後に、本稿での議論をまとめ、今後の研究課題を整理したい。

本来ベックの「個人化」論は、家族の分析枠組みとして展開されているわけではないが、本稿では、親性の「個人化」について「個人化」論から読み取り得るインプリケーションとして、「子ども願望」に注目した。女性のライフコースの「個人化」過程において、女性が独自のニーズをもつ自律的な存在となることによって、従来母親役割の中に埋め込まれていた親性は、複数の選択肢のなかの一つの選択肢となる。親性の「個人化」においては、個人が子どもが欲しいかどうかという「子ども願望」が決定的に重要になると同時に、選択の可能性とリスクというジレンマの中で、その調整の中核に個人が位置するようになる。そして個人を中心に据

えた親性への意味づけが、親性の「個人化」の重要な一側面であり、決定的な転換点となることを確認した。また最後に、ブルカルトの「分断化」仮説は、親性の決定過程の分析枠組みとして、「個人化」論を補完する役割を果たしていることを確認した。

本稿での分析を踏まえた上で、親性の決定過程の分析枠組みとして、「個人化」論とブルカルトの議論とを今後いかに接合するかが、筆者の今後の理論的課題となる。この研究課題に関する一つの理論上の方向性として、ミリュー研究を提示したが、この点については、理論的な検討だけではなく、個別具体的な親性の決定過程に関する実証的な分析によって、検証していく必要がある。また、親性の決定過程は、利用できる資源、選択肢を比較考量し、諸条件との兼ね合いの中で親になることを意味づけ直す葛藤のプロセスでもある。したがって親性の決定過程をよりダイナミックにかつホリスティックに捉えていくためには、客観的な生活諸条件と主観的な意味づけとの複合的編成が時間的経過の中でどのように変化したのかを明らかにする必要がある。その際、生殖技術の問題など、親性をめぐる今日の社会のあり方も考慮しなければならない。この点とかかわって、今日の親性に含まれている意味、すなわち親性に含まれている「ケア」の問題も、「近代家族」以降の家族のあり方を模索する家族研究にとって、決定的に重要となってくるであろう。

最後に、本稿では展開することができなかったが、親性の「個人化」は、あくまでも親の側からの意味づけの変化である。したがって、親性の「個人化」は、「近代家族的母-子関係」からの離脱の起点にはなりうるが、それはあくまでも親子関係における一方向的な変化であ

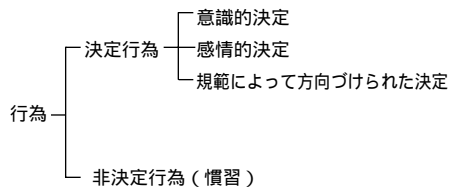
る。つまり、親子関係を分析の射程に入れるためには、子どもの視点が絶対不可欠となる<sup>42)</sup>。いずれにせよ、親であること、そして親であることを通じて問われている子どもの問題は、私たち個人一人一人の問題であると同時に、家族のあり方、ひいては社会のあり方をも問うていると言えるのではないだろうか。

## 註

- 1) 詳細は、拙稿『『近代家族的母—子関係』の歴史的系譜—戦後西ドイツの家族変動を中心として—』（『立命館産業社会論集』第36巻、第1号、立命館大学産業社会学会、2000年）を参照。
- 2) Jürgen Friedrichs (Hg.), *Die Individualisierungstheorie*, Leske+Budrich, Opladen, 1998.
- 3) Peter Sopp, *Literaturbesprechungen*, in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, Heft 4, Jg. 51, 1999, S. 770.
- 4) Edward Schorter, *The Making of the modern Family*, Basic books, 1975（田中俊宏他訳『近代家族の形成』昭和堂、1987年）。Kurt Lüscher, Franz Schultheis, Michael Wehrspau (Hg.), *Die "Postmoderne" Familie: Familiäre Strategien und Familienpolitik in einer Übergangszeit*, Universitätsverlag Konstanz GEBH, 1988.
- 5) 高橋秀寿「現代ドイツ家族の歴史的系譜：『ポストモダン』家族概念をめぐって」、『立命館文学』第532号、1993年10月）147頁。
- 6) Bernd Schofer, Harald Bender, Richard Utz, *Sind Singles individualisiert? Lebenslage und Lebensstil Alleinlebender*, in: *Zeitschrift für Bevölkerungswissenschaft*, Jg.17, 4/1991, S. 461-488. 彼らは、1978年と1987年に行われたメディア分析のデータを用いて、シングルの生活スタイルに関するこの仮説を実証的に明らかにした。
- 7) Elisabeth Beck-Gernsheim, *"Von der Liebe zur Beziehung? Veränderungen im Verhältnis von Mann und Frau in der individualisierten*

- Gesellschaft", in: Ulrich Beck, Elisabeth Beck-Gernsheim, *Das Ganz normale Chaos der Liebe*, Suhrkamp, 1990, S. 74.
- 8) Elisabeth Beck-Gernsheim, *Was kommt nach der Familie: Einblicke in neue Lebensformen*, C.H. Beck'schen Verlag, 1998, S. 18.
- 9) Elisabeth Beck-Gernsheim, "Auf dem Weg in die postfamiliale Familie : Von der Notgemeinschaft zur Wahlverwandtschaft", in: Ulrich Beck, Elisabeth Beck-Gernsheim (Hg.), *Riskante Freiheiten: Individualisierung in modernen Gesellschaften*, Suhrkamp, 1994. S. 115-138.
- 10) Rainer Münz, "Kinder als Last, Kinder aus Lust? Thesen zu individueller Reproduktion und familiärer Sozialisation", in: Joachim Matthes (Hg.), *Kreise der Arbeitsgesellschaft?*, Frankfurt / Main, 1982, S. 241.
- 11) Rosemarie Nave-Herz, "Kontinuität und Wandel in der Bedeutung, in der Struktur und Stabilität von Ehe und Familie in der Bundesrepublik Deutschland", in: Rosemarie Nave-Herz (Hg.), *Wandel und Kontinuität der Familie in der Bundesrepublik Deutschland*, Ferdinand Enke Verlag, 1988, S. 67-68.
- 12) 詳細については前掲拙稿を参照。
- 13) Bundesministerium für Jugend, Familie und Gesundheit (Hg.), *Nicht-eheliche Lebensgemeinschaften in der Bundesrepublik Deutschland*, 1985. zit. Gero Federkeil, "The Federal Republic of Germany: Polarization of Family Structure", in: Franz-Xaver Kaufmann, Anton Kuijsten, Hans-Joachim Schulze, Klaus Peter Strohmeier (eds.), *Family Life and Family Policies in Europe: Structures and trends in the 1980s*, Oxford University Press, p. 82.
- 14) François Höpflinger, *Wandel der Familienbildung in Westeuropa*, Campus Verlag, 1987. また, 小玉亮子氏は, 家族政策を中心とする少子化をめぐる言説が, 「家族にとっての子どもがもつ意味の変容」として展開されているという興味深い指摘を行っている。小玉亮子「<少子化問題>の歴史的検討に向けて—世紀転換期ドイツにおける議論から—」(『近代幼児教育史研究』第7号, 1993年), 44頁。
- 15) Edward Shorter, "Einige demographische Auswirkungen des postmodernen Familienlebens", in: *Zeitschrift für Bevölkerungswissenschaft*, Jg. 13, 1989.
- 16) Ebenda, S. 224.
- 17) Ebenda.
- 18) こうした理解は, 日本の研究の中にも見受けられる。例えば藤崎宏子氏は, 親子関係における「個人化」を, 各ステージにおける「個人化」の様態やその意味づけのあり方による違いから捉えようとしている。この場合, 初期母子関係における「個人化」には, 「ネガティブなニュアンス」が含まれるとされている。藤崎宏子「親と子: 交錯するライフコース」(藤崎宏子編『親と子: 交錯するライフコース』ミネルヴァ書房, 2000年), 5 - 6頁。
- 19) Elisabeth Beck-Gernsheim, *Die Kinderfrage: Frauen zwischen Kinderwunsch und Unabhängigkeit*, C.H. Beck'schen Verlag, 1989, S. 116-117 (木村育世訳『子どもをもつという選択』, 勁草書房1995年, 132頁)。
- 20) Barbara Sichtermann, "Ein Stück neuer Weltlichkeit: der Kinderwunsch", in: *Freibeuter* Nr.5, 1980.
- 21) Barbara Sichtermann, *Weiblichkeit. Zur Politik des Privaten*, Verlag Klaus Wagenbach, 1983, S. 22.
- 22) Elisabeth Beck-Gernsheim, "Vom "Dasein für andere" zum Anspruch auf ein Stück "eigenes Leben". Individualisierungsprozesse im weiblichen Lebenszusammenhang", in: *Soziale Welt*, Jahrgang 34, Heft 3, 1983.
- 23) Anthony Giddens, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Society*, Polity Press, 1992 (松尾精文・松川昭子訳『親密圏の変容: 近代社会におけるセクシュアリティ・愛情・エロティシズム』, 而立書房, 1995年)。Anthony Giddens, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press, 1991, pp. 88-98.

- 24) Franz Kaufmann, Alois Herlth, Joachim Quitmann, Regina Simm, Peter Strohmeier, "Familienentwicklung - generatives Verhalten im familialen Kontext", in: *Zeitschrift für Bevölkerungswissenschaft*, Heft 4, 1982, S. 530.
- 25) このことは、教育相談所における専門的相談に対するニーズの高まりにも示されている。この点に関して、オットー・エーベルトは、「親の自信喪失（Unsicherheit）」という概念を用いながら、検討を加えている。Otto M. Ewert, "Veränderungen in der Inanspruchnahme familienorientierter Beratungsangebote am Beispiel der Erziehungsberatung", in: Rosemarie Nave-Herz (Hg.), a. a.O., 1988, S. 259-278.
- 26) Elisabeth Beck-Gernsheim, a. a. O., 1989, S. 112（邦訳，125頁）.
- 27) Ebenda, S.114（邦訳，128頁）.
- 28) マイケル・ハート「情動にかかわる労働」(『思想』vol. 896, 1999年), 21 - 22頁。また、子どものケア労働については、以下の論文も参照。Maria S. Rerrich, "Veränderte Elternschaft: Entwicklungen in der familialen Arbeit mit Kindern seit 1950", in: *Soziale Welt*, Jg. 34, Heft 4, 1983.
- 29) Günter Burkart, *Die Entscheidung zur Elternschaft. eine empirische Kritik von Individualisierungs- und Rational-Choice-Theorien*, F. Enke, 1994, S. 2.
- 30) ブルカルトは、「個人化」論と「合理的選択」理論との関連性について、歴史的個人化過程、とりわけ価値崩壊や個人主義的価値観の浸透が、合理的選択理論に有利に作用したと見ている。なお、「合理的選択」理論の論者として、ジェームス・コールマン（James S. Coleman）の他に、ジョン・エルスター（John Elster）やハルトムート・エッサー（Hartmut Esser）が取り上げられている。Ebenda, S. 29-68.
- 31) Günter Burkart, "Individualisierung und Elternschaft - Das Beispiel USA", in: *Zeitschrift für Soziologie*, Jg. 22, Heft 3, 1993, S. 161-166.
- 32) Günter Burkart, Martin Kohli, "Ehe und Elternschaft im Individualisierungsprozeß: Bedeutungswandel und Milieudifferenzierung", in: *Zeitschrift für Bevölkerungswissenschaft*, Jg 15, 1989, S. 405-426.
- 33) 社会集団間の「分断化」の一例として、ブルカルトは、教育水準と人種を変数として、仕事と家庭との両立をめぐるコンフリクトの解決方法、個人にとっての親性の意義に関する比較調査（専門教育を受けた白人女性の集団と若い黒人の母親集団との比較）を行っている。Günter Burkart, a. a. O., 1993, S. 167-171.
- 34) Günter Burkart, a. a. O., 1994, S. 249-250.
- 35) 例えば、子どもを持つことが、客観的な諸条件からだけでなく、主観的にも非常に困難になりつつある事例として、実際の子ども数と理想の子ども数とのズレがしばしば取り上げられている Maria S. Rerrich, a. a. O., 1983, S. 421. 以下の論文も参照。Maria S. Rerrich, "Kinder ja, aber... Was es Frauen schwer macht, sich über ihre Kinderwunsch klar zu werden", in: Das Deutsche Jugendinstitut e.V (Hg.), *Wie geh't der Familie? Handbuch zur Situation der Familien heute*, 1988.  
また、親性の決定過程においては、すでに何人子どもがいるか、あるいは子育ての経験に対する評価も大きな要因となるという指摘がある。例えば、2人目の子どもを産むか産まないかの動機に関する調査において、ウルゼとレリッヒは、男女の意識の興味深い相違について言及している。ここでは、一般的に二人目の子どもをほしがるのは妻よりも夫であり、一人目の子どもを育てるにあたって夫が家事や育児に積極的に参加していた場合は、妻も同意する傾向があると指摘されている。Andrejs Urdze, Maria S. Rerrich, *Frauenalltag und Kinderwunsch: Motive von Müttern für oder gegen ein zweites Kind*, Campus-Verlag, 1981, S. 81.
- 36) ブルカルトは、広義の行為概念の中での決定概念の射程の捉え直しとして、行為概念を以下のように分類した。



Günter Burkart, "Eine Gesellschaft von nicht-autonomen biographischen Bastlerinnen und Bastlern? Antwort auf Beck /Beck-Gernsheim", in: *Zeitschrift für Soziologie*, Jg. 22, Heft 3, 1993, S. 188.

- 37) Ulrich Beck, Elisabeth Beck-Gernsheim, "Nicht Autonomie, sondern Bastelbiographie: Anmerkungen zur Individualisierungsdiskussion am Beispiel des Aufsatzes von Günter Burkart", in: *Zeitschrift für Soziologie*, Jg. 22, Heft 3, 1993.
- 38) ピーター・バーガーとスティファン・ハラディルは, 地位・階層・階級を超えた新しい様式の個人的「解決」として, 「生活状況 (Lebenslagen)」 「ライフコース (Lebenslaufe)」 「ライフスタイル (Lebensstile)」 という 3 つの概念に注目している。Peter A. Berger, Stifan Hradil, "Die Modernisierung sozialer Ungleichheit - und die neuen Konturen ihrer Erforschung, in: *Lebenslagen, Lebenslaufe, Lebensstile. Soziale Welt. Sonderband 7*. 1990.
- 39) Helmut Klages, *Weltorientierungen im Wandel. Rückblick, Gegenwartsanalyse, Prognosen*, Frankfurt/Main, 1984.

40) 高橋秀寿『再帰化する近代—ドイツ現代史試論：市民社会・家族・階級・ネーション』国際書院, 1997年, 43頁。小野耕二『転換期の政治変容』, 日本評論社, 2000年も参照。

41) 同前, 56頁。

42) フランクフルト学派に属するジェシカ・ベンジャミンは, 『愛の拘束』(1990年)の中で, 親子関係において母親を独立した主体として位置づけるために, 子どもが自律を達成するメカニズムについて検討している。また, クリステイーン・エヴァリングアムは, 『母性とモダニティ』(1994年)の中で, 母 - 子関係を潜在的に相対立する母親のニーズと子どもとのニーズとの調整を基軸とする間主観的社会関係として位置づけている。Jessica Benjamin, *The Bonds of Love. psychoanalysis, feminism, and the problem of domination*, Pantheon Books, 1988. (寺沢みずほ訳『愛の拘束』, 青土社, 1996年)。Christine Everingham, *Motherhood and modernity: an investigation into the rational dimension of mothering*, Open University Press, 1994.

#### ( 付記 )

本稿は, 2000年9月日本家族社会学会大会(於: 東北学院大学)における報告「親性 (Elternschaft)」における「個人化 (Individualisierung)」—ドイツの家族研究の動向から—」に加筆修正したものである。貴重なコメントをくださいました諸先生方に感謝いたします。

## The Individualization of Parenthood: Individualization Theory as a Framework for Family Studies

Mao SAITO \*

**Abstract:** This paper studies the significance of individualization of parenthood in the parent/adult-child relationship.

Parenthood in the modern family has been seen as based on the mother-infant relationship. This relationship has often been criticized by the women's movement or in feminist theory, but the new forms of mother-infant relationships or father-infant relationships has yet to be clarified. Therefore, I have used Ulrich Beck's individualization theory to reveal new forms of parent-infant relationships.

In the first section, I show that individualization theory can conceive objective and subjective aspects of the process of individualization synthetically. I overview how family studies have received individualization theory. Related to this, there are two reasons why the individualization of parenthood is important. For one, partnership and parenthood have separated under the process of family changes after WWII in West Germany. Accompanying these changes, there is the theoretical background of how post-modern family theory perceived parenthood. Specifically I refer to Edward Shorter, and consider the significance and limits of his theory. Based on these assumptions, I describe the implications of individualization theory for the analysis of parenthood in the third section. I focus on the desire for children, and reveal that the meaning of parenthood for each individual plays an important role. Finally, in order to develop the theoretical implications of individualization theory more effectively, I adopt Günter Burkart's "segmentation" hypothesis, and suggest a new orientation for analysis of decision-making in parenthood, by joining individualization theory and the segmentation hypothesis.

**Key words:** Ulrich Beck, individualization, parenthood, desire for children, segmentation, milieu

---

\* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University